（4 月 29 日）「創世記 30：25～36」

***今日、わたしはあなたの群れを全部見回って、その中から、ぶちとまだらの羊をすべてと羊の中で黒みがかったものをすべて、それからまだらとぶちの山羊を取り出しておきますから、それをわたしの報酬にしてください。***

（創世記 30 章 32 節）

・ヤコブは生まれ故郷に帰して欲しいと、ラバンに求めます。ヤコブがラバンの下で働いている期間は少なくとも 14 年でした。その間、子どもも多く生まれ、家畜などの財産も増えていったようです。

・そのことを知っているラバンは、ヤコブを手放したくありませんでした。ヤコブを通して神さまの祝福が与えられていることに、気づいていたのです。そこでラバンは報酬を支払うので、これまで通り働いてほしいと持ち掛けます。

・ヤコブはその願いに応え、もう一度群れを飼い、世話をすることを約束します。そしてぶちとまだらなど、羊や山羊の一部を報酬としてもらいたいと提案します。ただし当時ぶちやまだらのものは、価値がないと思われていたようです。

（4 月 30 日）「創世記 30：37～43」

***こうして、ヤコブはますます豊かになり、多くの家畜や男女の奴隷、それにらくだやろばなどを持つようになった。***

（創世記 30 章 43 節）

・ここに書かれていることは、何かおまじないのようにも見えます。神さまがこのようにしたらよいと、告げられたのかもしれません。ともかくヤコブは、自分の家畜を増やし、強くしていきました。

・このように「賢く」振る舞うヤコブの姿は、エサウから祝福を奪ったときの姿と重なります。しかしそのような彼を、神さまは祝福されたのです。

・彼は決められた手順を経て、ラバンからの報酬であるたくさんの家畜を手にしました。また奴隷も多く持つようになりました。しかしこのことをきっかけに、物語は次の展開に進んでいきます。



2023 年 4 月

# 創世記・出エジプト記　　通　読

## 4 月

（4 月　1 日）「創世記 24：10～14」
*祈った。「主人アブラハムの神、主よ。どうか、今日、わたしを顧みて、主人アブラハムに慈しみを示してください。」*
（創世記 24 章 12 節）

・アブラハムのしもべは、らくだ 10 頭を引き連れて出かけます。らくだは聖書では汚れた動物とされていますが、家畜として飼われていたようです。ただし肉を食べることは禁止されていました。
・しもべはナホルという町の井戸に行きます。夕暮れ時になると、人々は井戸に集まってきます。この地域は暑さのため昼間に重労働をすることは厳しく、水汲みは早朝や夕暮れ時におこなわれていました。
・彼は神さまにお祈りします。そして「こういう娘がいたら、その人を定められた者だとしてください」と提案します。イサクの妻は自分が決めるのではなく、あくまでも神さまに選んでいただくという思いがここに見られます。

（4 月　2 日）「創世記 24：15～27」
*「主人アブラハムの神、主はたたえられますように。主の慈しみとまことはわたしの主人を離れず、主はわたしの旅路を導き、主人の一族の家にたどりつかせてくださいました」と祈った。*
（創世記 24 章 27 節）

・アブラハムのしもべがいる井戸にやって来たのは、リベカという女性でした。彼女はアブラハムの兄弟ナホルの孫にあたります。しもべは彼女がどのような行動をとるのか、黙って見ていました。
・彼女はしもべに水を飲ませ、また、らくだたちにも十分な水を与えます。らくだは 10 頭いましたので、大変だったと思います。しかし彼女は井戸まで走りながら、水汲みを続けます。
・アブラハムはしもべを自分の生まれ故郷に行かせ、親族からイサクの妻を迎えるように命じていました。そしてリベカは、その条件を満たす女性でした。しもべは神さまにひれ伏して、感謝をささげます。彼女こそ、神さまによって選ばれた女性だったのです。



（4 月 27 日）「創世記 30：1～15」
*そのときラケルは、「姉と死に物狂いの争いをして（ニフタル）、ついに勝った」と言って、その名をナフタリと名付けた。*　（創世記 30 章 8 節）

・レアはヤコブの子を 4 人産みました。すると妹のラケルは姉を妬み、またヤコブに対し、「わたしに子どもをください」と訴えます。その言葉を聞いて、ラケルを愛していたヤコブもさすがに怒ります。赤ちゃんを授かるのは、神さまの恵みだと考えられていたからです。
・そこでラケルは自分の召し使いビルハをヤコブの妻として差し出します。ビルハはダン、そしてナフタリを産みます。ところがレアも、自分の召し使いジルパをヤコブの妻として差し出し、ジルパはガドとアシェルを産みます。
・こうなってくると、人物相関図なしには事態が呑み込めなくなってしまいます。今までのところでレア 4 人、ジルパ 2 人、ラケル 0 人、ビルハ 2 人というのが、それぞれの子どもの数です。なお新共同訳聖書には、それぞれの名前の由来が簡単に書かれています。

（4 月 28 日）「創世記 30：16～24」
*彼女は、「主がわたしにもう一人男の子を加えてくださいますように（ヨセフ）」と願っていたので、その子をヨセフと名付けた。*　（創世記 30 章 24 節）

・昨日の箇所で、レアの息子ルベンは野原で恋なすびを見つけていました。恋なすびはマンドレイクという名の植物で、妊娠に効果があると信じられていました。ラケルは、それを分けて欲しいとレアに頼んでいました。
・レアは、その日にヤコブと床を共にするという条件で、恋なすびをラケルに渡します。そしてレアは、さらに身ごもります。彼女はイッサカルとゼブルンという兄弟、そしてディナという女の子を産みます。これでレア 7 人（内 1 人女の子）となりました。
・ようやくラケルにも、子どもが生まれることになります。恋なすびのおかげでしょうか。彼女は男の子の名を「ヨセフ」と付けます。ここまでの子どもの名前は、レアとラケルが付けてきました。聖書では子の名は父が付けることが多く、妻が付けることはほぼなかったにもかかわらずです。

（4 月 25 日）「創世記 29：15～20」

*ヤコブはラケルを愛していたので、「下の娘のラケルをくださるなら、わたしは七年間あなたの所で働きます」と言った。*

（創世記 29 章 18 節）

・ラバンには、レアとラケルという二人の娘がいました。レアは雌牛という意味、ラケルは母牛という意味です。レアは優しい目をしており、ラケルは顔も美しく、容姿も優れていたそうです。
・ヤコブは井戸で出会ったラケルに一目惚れだったのでしょう。ラバンのところに滞在した一か月の間に、その愛は強くなったのかもしれません。ラバンの下で働く報酬として、ラケルを妻に欲しいと願います。
・ラケルの気持ちは聞かないの？と思いますが、当時は女性に相手を選ぶ権利はほとんどありませんでした。また身内に嫁がせることは良いこととされていたので、それほど抵抗もなかったでしょう。ヤコブは 7 年間、ラケルのために働きました。

（4 月 26 日）「創世記 29：21～35」

*とにかく、この一週間の婚礼の祝いを済ませなさい。そうすれば、妹の方もお前に嫁がせよう。だがもう七年間、うちで働いてもらわねばならない。*

（創世記 29 章 27 節）

・今日の箇所は、理解しづらいところです。ラバンは約束通り 7 年働いたヤコブに対し、ラケルではなく姉のレアを与えました。暗がりだったので、ヤコブは騙されてしまったようです。
・この場面は、目の見えないイサクを騙して祝福を得たヤコブ自身の姿と重なります。彼が長子の祝福を騙し得たように、ラバンはヤコブを騙し、長女レアを与えたのです。まさに、ブーメランです。
・ヤコブはさらに 7 年間ラバンの下で働く約束をして、ラケルも妻に迎えました。姉妹二人とも、妻となったのです。しかし神さまは疎んじられているレアを顧み、レアはルベン、シメオン、レビ、ユダという 4 人の子を生みます。



（4 月　3 日）「創世記 24：28～44」

*そこで、ラバンは言った。「おいでください。主に祝福されたお方。なぜ、町の外に立っておられるのですか。わたしが、お泊まりになる部屋もらくだの休む場所も整えました。」*

（創世記 24 章 31 節）

・アブラハムのしもべの元に、リベカの兄であるラバンが来ました。彼はリベカから自分の身に起こったことを聞かされたのでしょう。またリベカがしもべたちに泊まる場所を提供しようと言ったことも聞いたと思います。
・ラバンはしもべたちを招き入れます。ユダヤの人たちは寄留者や旅行に対して親切に接するのが普通でした。自分のおじさんに当たるアブラハムの名前が出たので、なおさらなのでしょう。
・ラバンはしもべたちの前に食事を出しました。しかし彼は食事に手を付ける前に用件を話したいと申し出ます。早く安心したかったのかもしれません。彼は神さまがリベカを選んだということを伝えます。

（4 月　4 日）「創世記 24：45～67」

*ラバンとベトエルは答えた。「このことは主の御意志ですから、わたしどもが善し悪しを申すことはできません。」*

（創世記 24 章 50 節）

・ここでラバンとリベカの父であるベトエルが登場します。彼とラバンはアブラハムのしもべの話を聞き、リベカがイサクの妻となることを了承します。神さまの意志だと聞かされると、反対するわけにもいかないでしょう。
・しもべの申し出が聞かれ、彼らは安心して食事をいただきます。また贈り物を兄や母に贈り、その日はベトエルの家に泊まります。娘の嫁ぎ先は遠く離れていたので、ラバンたちはもう少し長く家に留まるようにと願います。
・しかししもべは、次の日の朝に出発したいと申し出ます。そしてリベカもそれに従います。夕暮れ近く、リベカは散歩から帰って来たイサクを見ます。これがイサクとリベカの出会いでした。

（4 月　5 日）「創世記 25：1～6」
*アブラハムは、再び妻をめとった。その名はケトラといった。*
（創世記 25 章 1 節）

・サラが亡くなったとき、アブラハムは 137 歳でした。しかしアブラハムはさらに妻をめとります。アブラハムは 175 歳まで生きたと後の場面で書かれていますが、それにしても元気です。
・しかもその妻に、子どもが 6 人生まれます。イサクの誕生のときに、「高齢のわたしたちに」と言っていたのは何だったのでしょうか。男性は高齢でも子どもができるということなのでしょうか。
・アブラハムはケトラの子どもたちを「側女の子」とします。そしてイサクから遠ざけるために移住させます。以前イシュマエルとイサクとの母の間でいざこざがあったことを思い出し、予防線を張ったのでしょう。

（4 月　6 日）「創世記 25：7～11」
*アブラハムは長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた。*
（創世記 25 章 8 節）

・アブラハムは 175 歳で天に召されました。先祖の列に加えられるという言い方はあまりなじみがないかもしれませんが、ユダヤでは系図が大切にされていたので、その一員として加えられたというニュアンスでしょうか。
・彼はサラが亡くなったときに買った、マクペラの洞窟に葬られます。洞窟には横穴がたくさんあり、その一つに葬られたのだと考えられます。
・アブラハムの葬りの際、イサクだけではなくイシュマエルもその場にいたことが報告されています。サラによってイシュマエルとハガルは追い出されましたが、どこにいるかは知っていたということなのでしょう。



（4 月 23 日）「創世記 29：1～8」
*ふと見ると、野原に井戸があり、そのそばに羊が三つの群れになって伏していた。その井戸から羊の群れに、水を飲ませることになっていたからである。ところが、井戸の口の上には大きな石が載せてあった。*
（創世記 29 章 2 節）

・ヤコブは東の地の井戸に赴きました。そこで、ハランから来た人々と会いました、ハランはリベカの兄ラバンの住む場所です。彼らがハランから来たことを知ると、早速ヤコブはラバンのことについて尋ねます。
・もうすぐラバンの娘がやって来ることを知ると、ヤコブは羊を飼う人たちに、「もう一度草を食べさせにいったらどうか」と提案します。ラバンの娘との出会いの場面に、彼らがいて欲しくなかったのでしょうか。
・井戸には水を盗まれないように、石で蓋がしてありました。ラバンの娘が来たときに石を動かすことで、ポイントアップを狙ったのでしょうか。

（4 月 24 日）「創世記 29：9～14」
*ヤコブはやがて、ラケルに、自分が彼女の父の甥に当たり、リベカの息子であることを打ち明けた。ラケルは走って行って、父に知らせた。*
（創世記 29 章 12 節）

・しばらくすると、ラバンの娘ラケルが羊を連れてやってきました。新共同訳では「彼女も羊を飼っていたからである」と訳されていましたが、新しい聖書では「彼女は羊の世話をしていた」と変わりました。羊はあくまでラバンの持ち物ですので、その方が正しいでしょう。
・ヤコブは井戸の口から石を動かし、彼女が連れていた羊たちに水を飲ませます。ここまでは理解できますが、そのあとヤコブはラケルに口づけし、声を上げて泣きます。突然知らない男性が口づけしてきて泣きだしたら、パニックになりそうです。
・社会的な習慣の違いも当然あるでしょう。ラケルが急いで父ラバンに知らせに行くと、ラバンは走って迎えに来ました。そしてヤコブを自宅へ招き入れます。血縁の強いつながりが感じられます。

（4 月 21 日）「創世記 28：10～17」

***すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。***

（創世記 28 章 12 節）

・「主よ　みもとに近づかん」（聖歌 519 番）という歌があります。この歌はお葬式のときに使われることも多いのですが、聖歌集の中では「召命と旅」というカテゴリーに入れられています。
・ヤコブはエサウの怒りが静まるまで、パダン・アラムのベトエルの元に向かいます。その「旅」の途中で、ヤコブは神さまから啓示が与えられ、「召命」を受けます。
・「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」との約束を、ヤコブは神さまから与えられるのです。

（4 月 22 日）「創世記 28：18～22」

***わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。***

（創世記 28 章 22 節）

・夢で天に達する階段を神の使いが昇り降りしているのを見たヤコブは、そのとき枕にしていた石を柱として据え、油を注ぎます。ヤコブはその場所を「畏れ多い場所（新しい聖書では『恐ろしい所』）」と言います。
・このころ人々は、神さまの顔を見ると死ぬと考え、また近くにおられることすら恐れていました。イエス様の「わたしはいつも共にいる」という約束を信じるわたしたちにとっては、少し違和感のあるところです。
・彼がその場所に名付けた「ベテル」とは、「神の家」という意味です。彼はまた、自分に与えられるものの 10 分の 1 を神さまに献げるという誓願を立てました。よく教会で聞く十一献金とは、ここからきたものです。



（4 月　7 日）「創世記 25：12～18」

***イシュマエルの子孫は、エジプトに近いシュルに接したハビラからアシュル方面に向かう道筋に沿って宿営し、互いに敵対しつつ生活していた。***

（創世記 25 章 18 節）

・昨日の場面でアブラハムの葬りに参加したイシュマエルですが、彼は 137 歳で亡くなったと書かれています。イサクの物語はここから盛り上がっていきますが、イシュマエルはこの先登場しません。
・新共同訳で「互いに敵対しつつ生活していた」と訳されている 25 章 18 節ですが、新しい聖書では「イシュマエルはすべての兄弟と対立して暮らした」という訳に変わっています。
・新共同訳ではイシュマエルの子孫同士の仲が悪かったと解釈できますが、新しい聖書ではイシュマエルがイサクやケトラの子どもたちと対立していたということになります。ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の関係を考えると、なかなか複雑です。

（4 月　8 日）「創世記 25：19～26」

***その後で弟が出てきたが、その手がエサウのかかと（アケブ）をつかんでいたので、ヤコブと名付けた。リベカが二人を産んだとき、イサクは六十歳であった。***

（創世記 25 章 26 節）

・イサクがリベカを妻として迎えたのは、彼が 40 歳のときでした。この時代、子どもを授かることは神さまに祝福されたしるしだと考えられていました。しかしなかなかリベカは身ごもらなかったようです。
・その後神さまはリベカの祈りを聞かれ、イサクが 60 歳のときに双子の子どもが生まれます。彼らの名前はエサウとヤコブ。先に生まれたのがエサウなので、長男はエサウということになります。
・しかしヤコブはその名の通り、エサウのかかと（アケブ）を掴んでいたそうです。すでにエサウの行動を邪魔しているようにも見えます。これから先の物語でも、実際にヤコブはエサウの前に立ちはだかります。

（4 月　9 日）「創世記 25：27～34」
*エサウはヤコブに言った。「お願いだ、その赤いもの（アドム）、そこの赤いものを食べさせてほしい。わたしは疲れきっているんだ。」彼が名をエドムとも呼ばれたのはこのためである。*
（創世記 25 章 30 節）

・申命記 21 章 15～17 節には「長子権について」という内容が書かれています。それによると、長子は他の子どもの 2 倍の財産を受け継いでいたようです。また土地も長子が相続していました。
・エサウはそれほど大切なものを、たった一回の食事の代わりにヤコブに渡してしまいます。この行為は長子の権利を軽んずるばかりでなく、神さまのことをないがしろにすることだったのでしょう。
・エサウは赤いもの（アドム）を欲したこともあり、エドムとも呼ばれます。エドム人は偶像を崇拝し、ユダヤ人と仲が悪かったそうです。この物語は、「エドム人の先祖はこんなひどいことをした」とも伝えているのです。

（4 月 10 日）「創世記 26：1～6」
*あなたがこの土地に寄留するならば、わたしはあなたと共にいてあなたを祝福し、これらの土地をすべてあなたとその子孫に与え、あなたの父アブラハムに誓ったわたしの誓いを成就する。*
（創世記 26 章 3 節）

・20 章でアブラハムとサラはゲラルに滞在しました。その際アブラハムは周りの人に、サラのことを妹だと話していました。
・今回、同じようにイサクがゲラルに向かいます。住んでいた地に飢饉が起こったのが原因です。普段から雨が少ないユダヤでは、ちょっとしたことで干ばつが起こり、飢饉になるようです。
・その中でエジプトは、ナイル川の恵みもあり豊かでした。飢饉のときはエジプトを頼らざるを得なかったようです。しかしイサクは神さまに、エジプトに下らずにゲラルにいるように命じられます。そして祝福を約束されるのです。



（4 月 19 日）「創世記 28：1～5」
*ここをたって、パダン・アラムのベトエルおじいさんの家に行き、そこでラバン伯父さんの娘の中から結婚相手を見つけなさい。*
（創世記 28 章 2 節）

・大河ドラマを見る時に人物相関図は手放せませんが、旧約聖書ではさらにいとこ同士の結婚などもあり、作っておくと便利です。ベトエルはヤコブの母であるリベカの父、ラバンはリベカの兄です。
・イサクがリベカと結婚したときも、アブラハムは自分の生まれ故郷でイサクの妻を探しました。同じようにイサクはヤコブにも、カナン人以外の女性を妻にするように言います。カナン人はいわゆる異邦人です。
・この背後には、エサウの怒りが収まるまで身を隠すという目的がありました。しかしそれと同時に、同胞の中から妻を迎え、血を混ぜないということが彼らの中ではとても大切なことでした。

（4 月 20 日）「創世記 28：6～9」
*エサウは、カナンの娘たちが父イサクの気に入らないことを知って、イシュマエルのところへ行き、既にいる妻のほかにもう一人、アブラハムの息子イシュマエルの娘で、ネバヨトの妹に当たるマハラトを妻とした。*
（創世記 28 章 8～9 節）

・エサウは 40 歳のとき、カナンの女性であるヘト人の妻を二人迎えていました。しかしその妻は、イサクとリベカにとって心の痛みとなっていたようです。
・エサウのこのような行動が、神さまの目には良く映らなかったのでしょう。長子の権利も、民族としてのアイデンティティも、ないがしろにしていると思われても仕方ありません。
・そこでエサウは、同胞の中からもう一人妻を迎えます。イサクの異母兄弟であるイシュマエルの娘マハラトです。彼女の名は、25 章 12～18 節の「イシュマエルの系図」には出てきません。兄のネバヨトが出てくるだけです。女性は系図には載せられないのです。

（4 月 17 日）「創世記 27：30～40」
*エサウは叫んだ。「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り（アーカブ）欺いた。あのときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった。」エサウは続けて言った。「お父さんは、わたしのために祝福を残しておいてくれなかったのですか。」*
（創世記 27 章 36 節）

・エサウが獲物をしとめ、イサクの元に持って行ったときには、すでに祝福を受けたヤコブはイサクの前から出て行っていました。
・イサクはヤコブに祝福を与えてしまったことに気づかされます。しかし一度ヤコブをエサウの主人と定めてしまった以上、それを覆すことはできません。
・ただしエサウがヤコブに対して「あのときはわたしの長子の権利を奪い」と怒るのは、筋違いでしょう。エサウは食事欲しさに、長子の権利を軽んじました。その報いを受けたのかもしれません。

（4 月 18 日）「創世記 27：41～46」
*エサウは、父がヤコブを祝福したことを根に持って、ヤコブを憎むようになった。そして、心の中で言った。「父の喪の日も遠くない。そのときがきたら、必ず弟のヤコブを殺してやる。」*（創世記 27 章 41 節）

・エサウはヤコブの行為に対して、怒りを燃やします。エサウは父イサクが死んだら、そのときにヤコブも殺してしまおうと心の中で言います。しかしその思いは、母リベカに伝わります。きっと表情や行動からも、怒りがにじみ出ていたのでしょう。
・母にとって、夫と息子を同時に亡くすことなど、考えたくもないことでした。そもそもこの時点で長子はヤコブであり、家督を継いで祝福されているのもヤコブです。
・もしもエサウがヤコブに手を掛けたら、自分の主人を殺害することになり大問題です。しかし母リベカは兄の怒りが静まるまで身を避けるようにと伝えます。このリベカの偏愛もまた、家族をバラバラにした原因の一つなのでしょう。



（4 月 11 日）「創世記 26：7～14」
*多くの羊や牛の群れ、それに多くの召し使いを持つようになると、ペリシテ人はイサクをねたむようになった。*
（創世記 26 章 14 節）

・20 章には、アブラハムとサラがゲラルに滞在したときのことが書かれていました。そのときアブラハムは、サラのことを妹だと言います。そのためゲラルの王は、サラを召し入れました。そしてその結果、ゲラル王は神さまから死の予告をされました。
・今回もイサクはリベカのことを、妹だと言います。なぜ素直に妻だと紹介しないのか、妻だと言ったら本当に殺されるのか、疑問が残ります。しかも今回はペリシテ王は過ちを犯す前に妻であることに気づき、神さまの怒りなどは出てきません。
・その後イサクは神さまに祝福され、ゲラルの地で多くの収穫を得ます。しかし大変裕福になっていく居留者であるイサクのことを、ペリシテ人は快く思わなかったようです。

（4 月 12 日）「創世記 26：15～25」
*イサクは、そこに祭壇を築き、主の御名を呼んで礼拝した。彼はそこに天幕を張り、イサクの僕たちは井戸を掘った。*（創世記 26 章 25 節）

・乾燥地帯であったこの地域では、農業を生業としている人たちと遊牧民との間で、水をめぐる争いが頻発していたのでしょう。遊牧民は井戸を埋められると、他の土地を探さなければなりません。
・イサクは生きていくために、強奪や徹底抗戦ではなく、退避を選んだようです。争いがおこらなくなるまで場所を変えて井戸を掘り続けた、そのように読むことができるからです。
・そしてイサクは、ベエル・シェバに行きます。そこはイサクの父アブラハムが、ゲラルの王アビメレクと契約を交わした地でした。その契約も井戸（水）に関するものでした。またそのとき将軍ピコルも、アビメレクと共にいました。

（4 月 13 日）「創世記 26：26～35」

***彼らは答えた。「主があなたと共におられることがよく分かったからです。そこで考えたのですが、我々はお互いに、つまり、我々とあなたとの間で誓約を交わし、あなたと契約を結びたいのです。」***

（創世記 26 章 28 節）

・ペリシテの王アビメレクと友人アフザト、そして将軍ピコルがイサクの元にやって来ました。イサクがいたベエル・シェバは、以前アブラハムが契約を結んだ場所です。
・そのときの契約の相手は、ゲラルの王アビメレクと将軍ピコルでした。今回と同じ人物なのでしょうか。アビメレクはこの少し前に、裕福になるイサクを自分たちの近くから追い出していました。しかしさらに栄えていくイサクを見て、契約を結ぶべきだと考えたのです。
・様々な民族が入り乱れる中、契約を結んでお互いに害を与えないことを約束することは重要なことだったでしょう。一緒に飲み食いすることで、その契約はさらに強固になっていきます。

（4 月 14 日）「創世記 27：1～4」

***「わたしの好きなおいしい料理を作り、ここへ持って来てほしい。死ぬ前にそれを食べて、わたし自身の祝福をお前に与えたい。」***

（創世記 27 章 4 節）

・エサウとヤコブは、イサクが 60 歳のときの子どもでした。昨日の箇所に、エサウは 40 歳になって二人の妻を迎えたことが書かれています。つまりこのとき、イサクは少なくとも 100 歳になっていました。
・年を取り、目がかすんできたイサクは、エサウを呼びます。それは彼を祝福するためでした。また自分が死ぬ前に、長子であるエサウに対して家督を譲ることも考えていたことでしょう。
・しかしエサウは 25 章 27～34 節で、食べ物と引き換えに長子の権利を弟ヤコブに売り渡していました。そのことを考えると、明日の箇所以降に起こる出来事はエサウが引き起こしたとも考えられるのです。



（4 月 15 日）「創世記 27：5～17」

***母は言った。「わたしの子よ。そのときにはお母さんがその呪いを引き受けます。ただ、わたしの言うとおりに、行って取って来なさい。」***

（創世記 27 章 13 節）

・25 章 28 節には、このように書いてありました。「イサクはエサウを愛した。狩りの獲物が好物だったからである。しかし、リベカはヤコブを愛した」。このことが、悲劇を招きます。
・リベカはエサウを祝福しようとイサクが話しているのを聞きます。リベカはそれを聞いて、「いや、ヤコブが祝福されるべきだ」と思ったのでしょう。リベカはイサクをだまして祝福を受けるように、ヤコブを説得します。
・リベカはヤコブにエサウの着物を着せ、子山羊の皮をヤコブの腕と首の滑らかなところにつけます。この徹底ぶりは、どうしてもヤコブに祝福を与えたいという強い気持ちからくるものです。長子の権利を軽んじたエサウとの違いが、浮き彫りになります。

（4 月 16 日）「創世記 27：18～29」

***ヤコブが父イサクに近寄ると、イサクは彼に触りながら言った。「声はヤコブの声だが、腕はエサウの腕だ。」***

（創世記 27 章 22 節）

・年を取って目がかすんでいたイサクは、息子の顔が判別できないほど見えなくなっていました。声がエサウとは違うことには気づいたようですが、彼は手で触れた感覚の方を信用します。
・このやり取りを読んで、七匹の子山羊を思い出したのはわたしだけではないでしょう。オオカミは腕や足に小麦粉を塗りたくりました。自分の容姿を他の人に見せかけて騙すという行為は、決してほめられたものではありませんが。
・見事にイサクを騙し切ったヤコブは、祝福を受けました。ヤコブは後に神さまの使いと格闘しますが、そのときも祝福に対して強い執着心を持っていました。その思いを、もしかしたら神さまは評価しているのかもしれません。